

# 佐伯彰一論序説

大 貫 徹

はじめに

2016年の正月に93歳の生涯を終えた文芸批評家佐伯彰一（1922年4月26日—2016年1月1日）は、いままで誰ひとりとしてこのことを正面切って論じたことはないのだが、実は1960年代後半から1970年代前半という10年間に文芸批評家として決定的とも言える「変貌と断念」を経験した。この「変貌と断念」は別物というわけではない。まず佐伯の文学意識や歴史感覚に大きな変貌が生じ、それを踏まえた形で、佐伯は日本文学史全体を「エロス」という観点から再構築しようとしたのだが、結局それを断念したというのがその間の経緯である。その一方で、佐伯彰一というと、人はみな自伝研究を思い浮かべる。佐伯の弟子筋にあたる評論家入江隆則も「今日までの佐伯氏の文芸批評家としての最も大きな業績は、衆目の見るところすでに四冊に及ぶ自伝論の完成であろう」<sup>1)</sup>と述べているし、比較文学者の平川祐弘も佐伯彰一追悼記事の中で「氏の大功績の一つは、日本文壇に頑固に存する小説至上主義を排し、自伝文学を復権させ、戦後、自虐的にもてはやされた「西洋人には自我あり東洋人には自我がない」式の妄説を壊したことだ」<sup>2)</sup>と記している。実際、佐伯も自伝ジャンル、伝記ジャンルの復権ということで精力的にその方面の執筆を行ってきた。しかしそうした佐伯の姿は、先に記した「変貌と断念」の後に、言うなれば余儀なく生まれたものなのだ。ところで今から半世紀前に文芸評論家の篠田一士は「『伝統』の創造的契機」と題するエッセイのなかで次のようなこ

とを述べていた。

明治開国以来のわが近代文学芸術の歴史を展望してみた場合、創造力の契機としての伝統の所在は今日においても、なお判然としていない。(中略) 西欧派とよばれるひとたちも、また、国粹派とよばれるひとたちも、ひとしく、伝統のもつ創造的契機については概念としてこれを承知しているにもかかわらず、その肝心の伝統なるものの実体について、エリオットのように(中略)明確な断言ができないのである。<sup>3)</sup>

ここでのエリオットとは言うまでもなく「伝統と個人的な才能」を書いた T. S. エリオットのことである。50 歳代前半の佐伯がもしあのとき日本文学史の再構築という試みを「断念」しなかったならば、佐伯が篠田の言う「明確な断言」をしていたのではないかと思われる。その意味で佐伯の断念は残念としか言いようがない。とはいえ、佐伯の思い描いていた再構築の試み、それをここでもう一度詳しく検討することは十分に意味あることだろう。しかしその前にそもそも佐伯の変貌とは何か、まずはここからはじめなければならない。本論では、紙面の都合上、佐伯の変貌に焦点を絞って論じたい。いわば来るべき佐伯彰一論の序章という設定である。

## 第 1 章 佐伯彰一の変貌

最初に佐伯 68 歳の夏に行われた佐伯へのインタビューの冒頭部分を引用しよう。

戦争中になぜアメリカ文学研究を思いついたのか、その辺は実は判然としませんが、僕が東大の英文科に入りましたのは、一九四一年の春。その年の十二月に日米戦争が持ち上がったわけで、少

しオーバーにいえば、アメリカに興味を持ち出した途端に、アメリカが敵国になりかわっちゃったというドラマティックな経験があったわけです。<sup>4)</sup>

ここで佐伯は「アメリカに興味を持ち出した途端に、アメリカが敵国になりかわっちゃった」と語っている。論者はこの経験こそ文芸批評家佐伯彰一の出発点と考えているのだが、そう結論づける前にこの一節をもう一度見てみよう。そうするとここでかなり奇妙なことが語られているのに気づくはずである。というのも、東大英文科の学生である若き日の佐伯がアメリカ文学研究を思いついたことと、日米戦争が持ち上がったこととは、言うまでもなく、実際にはまったく別な話で、そこには本来何の関連もない。にもかかわらず佐伯はそこに関連を見出し、それどころか、そこに大きなドラマを想定し、しかも自分がその登場人物のひとりであるかのように、あえて「ドラマティック」という言葉を使っているからだ。もちろん佐伯もこうした奇妙さには気がついているはずだ。それでもそのように言い切ってしまうのは、ひとつには、「ドラマティックな経験」とユーモラスに呼ぶことで若き日の辛い思い出をカラッとしたものに変えたいという気持ちがあるからだろう。しかしそれだけではない。どうも佐伯は「アメリカに興味を持ち出した」ことと「アメリカが敵国になりかわっちゃった」こと、この二つには何らかの結び付きがあると本気で思っているようなのだ。それもドラマ仕立てで考えているようなのだ。これに関連して、もうひとつ引用しよう。インタビューの約6年前、佐伯62歳の1984年12月に刊行された『日米関係のなかの文学』（文藝春秋）からである。

日米戦争が勃発したのは、十九歳のぼくが、ちょうど大学に入った年でした。東大文学部に入って、アメリカ文学専攻と思いきめた年の暮れに、思いがけず戦争が起って、自分のえらび取った生涯の専攻の

対象が、一瞬にして敵国の文学となり変ってしまいました。この際のショックは、じつの所、すでに六十歳の坂をこした現在のほくのうちにも、生き続けているものです。<sup>5)</sup>(傍点佐伯)

先に引用したものとほぼ同じである。敵国に傍点を付け、しかも「一瞬にして」という言葉まで付けている。まさに「ドラマティックな経験」そのものである。それにしても「すでに六十歳の坂をこした現在のほくのうちにも、生き続けている」というのだから、「アメリカが敵国になりかわっちゃった」という体験がいかに深く佐伯のなかに根を下ろしているのか、この一節ほど明確に表現しているものはない。ところが話はこれで終わらない。佐伯が残した数多くの著書、論文、エッセイ等を辿ってゆくと、佐伯のこうした見方が最初からあったわけではなく、1960年代後半に突如として現われてきたことに気づく。まさに「突如として」としか言いようがないのだ。まずはこのことを明らかにしよう。

1969年2月に筑摩書房から刊行されて以来、いくつもの版を重ねている佐伯の著書に『アメリカ文学史——エゴのゆくえ』がある。その最後に「補足的に」と題された章があり、そこに二つのエッセイが収録されている。最初に置かれているエッセイは「アメリカ文学研究の問題——〈戦中派〉の場合」と題され、『文学』(岩波書店)(1960年4月号)に掲載された同名エッセイが初出である。二番目に置かれているものは「アメリカのエゴのゆくえ」と題され、『群像』(講談社)(1968年11月号)に掲載された同名エッセイが初出である。こちらは最初のエッセイの8年後に執筆されたことになる。どちらのエッセイも末尾に執筆時期が括弧書きで記されており、最初のは1960年、二番目のものは1968年となっている。

まずは最初のエッセイから引用しよう。佐伯はこのエッセイの冒頭から「まずほく自身の例から始めさせて頂く。ほくは、昭和十六年に東大の英文科に入った。十六年は開戦の年であり、半年くり上げで、十八年の夏、

卒業するまでずっと戦時下の英文科学生だった。学校を出ても、英語で飯を食うあては全くなかったし、それよりひどい病気にでもかからぬ限り、卒業はそのまま軍隊の門につながっていた。そんな時期に、なぜとくに英文科をえらぶ気持ちになったのか。勇ましい「抵抗」の精神などいい出せば、うそになる」<sup>6)</sup>と記した後で以下のように語っている。

そんなぼくにとって、『白鯨』のあたえた衝撃は当然強烈だった。(中略) 孤独と反抗の強烈な探求者、造型者という一面こそ、ぼくの心をつき動かしたものであった。当時のぼくが、イギリス小説のなかに求めて見出し得ず、大いに不満がっていた所以のものが、メルヴィルによっていきよに満たされたようにさえ感じたのであった。『白鯨』を読みおえたぼくは、ただちに卒業論文にはこの作家を、と思いきめたのだが、ぼくの論文の主題は、もっぱらメルヴィルの、当時の社会的、また文学的環境からの異常に際立った孤立に向けられ、またそれほどの孤立をよく活力あふれる制作の動因に転じ得た秘密に向けられた。ぼくは、何よりこの作家のうちに、ロマン主義的なエグザイルの姿を、近代的芸術家の「栄光ある孤立」の一例を見てとることを望んだのである。(中略) 一番根元で働いていたのは、戦時下の重苦しさに対する反撥であり、当時のわが国にかくべつ多かつた順応的、「協力」的な作家へのつよい嫌悪であった。孤立こそ見事な文学的結実にみちびくという命題を、是が非でもわが手で確かめたい欲求は、そこから発していた。ぼくの卒業論文は、当然、調子の高い、「孤立」讚美にかたむきがちであった、と記憶している。(中略) 要するにメルヴィルに読みふけた当時のぼくにとって、「アメリカ文学」という意識はきわめて稀薄であった。『白鯨』や『ピエール』は、まず限定ぬきの「文学」そのものであって、文学史や系譜という問題は、ぼくの念頭には浮かばなかった。(中略) それに、一世紀近い時代の距

離も有利に働いて、この作家の同国人を相手に、自分の国が戦っているという眼前の事実も、何の重味ももたなかった。<sup>7)</sup>(傍点佐伯)

ここでも佐伯は冒頭から開戦の話を持ち出す。しかしここには「敵国アメリカ」とか「ドラマティックな経験」という言葉は出てこない。それどころか、引用後半では「当時のぼくにとって、「アメリカ文学」という意識はきわめて稀薄であった」とさえ言い切っている。だからこそさらに佐伯は「この作家の同国人を相手に、自分の国が戦っているという眼前の事実も、何の重味ももたなかった」と記すことになるのだ。ここには先に引用した二つとは正反対のことが記されている。当時の佐伯が文学青年ということもあり、なによりもまず文学そのものへの興味が強く、意識してアメリカという国の文学を研究しようということではなかったのかもしれない。実際、佐伯は『白鯨』や『ピエール』は、まず限定ぬきの〈文学〉そのものであって、文学史や系譜という問題は、ぼくの念頭には浮かばなかった」と記している。それにしても先に触れた二つの引用との違いはあまりにも大きい。これに関して、さらに探求を進めてみたい。実はここに、これより先に書かれたエッセイがある。それは前年の1959年10月に刊行された『聲』(丸善)に掲載された「(海外文学)ロレンスとアメリカ文学——アメリカ小説と想像力」である。これは最新の海外文学を紹介する欄に収められたものだが、この中で佐伯はD. H. ロレンスの『アメリカ古典文学研究』を引き合いに出しながら以下のように述べている。

ぼくがこの本(ロレンス『アメリカ古典文学研究』=引用者注)を始めで知ったのは、戦争中の、あの閑散で陰氣な東大の英文研究室の片隅においてであった。(中略)研究室の書棚にふと見つけた埃だらけのこの本は、ぼくの中の出来合いのアメリカ像を一氣に叩きこわされてきた。(中略)二十歳の若者が「文学」の名で漠然と憧れていた何も

のかが、そこに息づいていることを疑うことは出来なかった。ほくは、さっそくその翌日から、自分で『白鯨』を読み始めたのである。<sup>8)</sup>

ここにはロレンスの導きによって文学そのものの魅力に直に触れあった感動や喜びが生き生きと語られている。佐伯はその少し後で「文學的〈開眼〉の喜び」<sup>9)</sup>という表現さえ使っていて、敵国という言葉はまったくでてこない。むしろ「戦時下の隔絶された孤獨の中で、二十歳の無學な青年がおぼえた感動」<sup>10)</sup>という表現さえ見られ、先に引用した1960年時期の執筆とほとんど同じ視点であることが分かる。つまりこの当時の佐伯、年齢の上から言えば30歳代の佐伯にとっては、戦時中のアメリカ文学体験とはむしろメルヴィル体験あるいはメルヴィルを通じての文学開眼体験であったと思われ、さらに言えば自分自身をエイハブ船長のような「孤高」の存在に見立てていたとも考えられる。後年「アメリカに興味を持ち出した途端に、アメリカが敵国になりかわっちゃった」(傍点引用者)と繰り返し語るようになるようなものではまったくなかったのだ。ところが『アメリカ文学史』に収録されたもうひとつのエッセイ(「アメリカのエゴのゆくえ」)となるとこれが一変するのだ。これは先に引用したエッセイの8年後の1968年に執筆されたものである。冒頭の部分を見てみよう。

アメリカの文学史の大筋さえろくすっぽ知らずに、いきなりメルヴィルの『白鯨』にはほくはぶつかった。しかも、太平洋戦争さ中のことで、げんに自分の国がたたかい、自分も間もなくぶつからされる敵国の文学という意識が、どこかで働いてもいた。異常な環境のもとでの、はりつめた初見参には違いなかった。<sup>11)</sup>

ここにはメルヴィルの『白鯨』という言葉こそ登場しているが、しかしいきなり敵国の文学という表現が出てきている。それも「げんに自分の国

がたたかい、自分も間もなくぶつからされる敵国の文学」とある上に「異常な環境のもとでの、はりつめた初見参」と言うのだから、今読んでもその当時の佐伯の強い緊張感が伝わってくる。わずか8年前には「自分の国が戦っているという眼前の事実も、何の重味ももたなかった」と記していたなどまったく忘れてしまったかのようである。さらに見ていこう。すると以下のようなことが記されていることに気づく。

今からふり返ると、いわば入営早々で、西も東も判らない新兵がいきなり敵の総司令官に面とぶち当たられたようなものだ。(中略) この初対面、この組合せは、まるで誰かの手で仕組まれたかのように劇的なものだった。<sup>12)</sup>

ここには自己劇化、ここに極まりとでも言いたいような表現が見られるが、佐伯はまるで自分が大きなドラマの(主人公とは言わないまでも)劇中人物のひとりであるような気分になっているようである。もうひとつ、同様な例を示そう。『アメリカ文学史』の冒頭に書かれた「著者まえがき」の一節である。著書の刊行年から判断する限り、執筆時期は1969年初頭と考えられる。

戦争中の大学生としてアメリカ文学を読みはじめたぼくにとっては、アメリカ文学は、たんに任意の外国文学の一つではなく、かつて敵として戦った隣国の文学である。明治の開国以来、ほとんど運命的ともよびたい、入りくんだ絆でからみ合わされてきた隣国人の生み出した文学であり、この運命的な隣人の本質を見きわめ、わが手でたしかめたいという衝動を、ぼくのアメリカ文学を読む作業から排除することは不可能だ。<sup>13)</sup>

ここにも先の引用と同様に「敵として戦った」とか「運命的」という表現が使われている。となると次のようなことが言えるのではないか。すなわち、1960年頃までは、佐伯が戦時中のアメリカ文学体験を語る際には、アメリカ文学ではなく、作家メルヴィルあるいはむしろ文学そのものが前面に出ていて、そしてそこには孤立という言葉が溢れていた。しかしそれが1960年代後半以降になると、「敵国アメリカ」や「ドラマティックな経験」という言葉があたかも定番であるかのように前面に登場して来る。明らかに佐伯自身に何かが生じ、その何かが若き自分への見方を大きく変貌させてしまったのだ。それにしてもこの違いは大きい。1960年代後半になると、佐伯は自分自身を歴史の大きな動きの中のひとりとして見るようになってくる。言うなれば、頭でっかちなロマン主義者から脱却し、ある意味健全な歴史感覚が佐伯の中に生まれてきたとも言えるだろう。もっとも、健全であるとは必ずしも言えないかもしれない。というのも、佐伯はアメリカを単に敵国と見るだけではなく、それ以上の何かとして見ているからである。佐伯はアメリカを「ほとんど運命的ともよびたい、入りくんだ絆でからみ合わされてきた隣国」と表現し、さらにはもっと短く「運命的な隣人」とさえ呼んでいるのだ。アメリカを「隣国」と見る、佐伯のこのような見方がたとえば国際関係論というような分野で正統的なものであるかどうか寡聞にして知らない。むしろかなり極端な見方と言うべきものであろう。あるいはこう言った方がよいかも知れない。佐伯はこのとき日米両国の間に国際関係論などの専門家ではとうてい見出すことが出来ないような何かを見出したのだと。もしかするとそれは佐伯にしか見出せないような何かかもしれない。それにしても「運命的ともよびたい、入りくんだ絆でからみ合わされてきた隣国」という表現はかなり強烈である。これに関して、佐伯は『内なるアメリカ・外なるアメリカ』（新潮社、1971年）の巻頭に置かれた「ドラマとしての日米関係」というエッセイの中できわめて興味深い一節を記している。

アメリカとの関係をぬきにして、わが国の近代史を考えることはできない。たんに国際関係論上の欠くべからざる一項目というにはとどまらぬ、日本近代史の中核にまで、アメリカの存在は底深く食い込んでいる。<sup>〔ママ〕</sup>という事実が、これまで意外に無視、少なくとも軽視されてきたのではないだろうか。(中略) 太平洋をはさんだこの両国の関係は、その歴史的な成立の事情、人種的な構成から、自然的環境などにおける、余りにもいちじるしい対照、相違から始めて、その初期の接触、やがて太平洋上の激突に至った推移に至るまで、歴史の女神の手によって仕組まれた、一篇の壮大なドラマの趣をおのずからに備えている。<sup>14)</sup> (傍点引用者)

そう、佐伯は日米両国の関係のなかに「歴史の女神の手によって仕組まれた、一篇の壮大なドラマ」を見出していたのである。実際、佐伯はペリーの開国要求以来の日米交渉史百年の中になんと三幕物のドラマを見出してしまうのである。

その接触のそもそもの発端からして、劇的な緊張をはらんだ、ほとんどオペラ的な開幕であり、重苦しい黒船騒動の後には、万延元年のわが国の遣米使節団による、ニューヨークの「ブロードウェイのページェント」が、引きつづいて一気に緊張をときほごす「コミック・リリーフ」の役割をさえ果している。(中略) ドラマという比喩をここでもう一度とり上げれば、日米関係は、ここから、劇的な緊張と新展開をはらむ第二幕へと踏みこみ、やがてじりじりと、かつまっしぐらに、劇的なクライマックスたる第三幕へと突き進んで行ったといえるだろう。<sup>15)</sup>

そしてそのドラマに先ほど述べたように佐伯も登場人物のひとりとして

登場することになるのだ。いやそれどころかむしろ自分が主人公のひとりだと言っているようなところさえある。実はこのことを裏付けるかのような一節がある。それは『内なるアメリカ・外なるアメリカ』の二番目のエッセイ『「日米之新関係」——旅行記の楽しみ』（初出は『季刊芸術』第3巻第3号、1969年7月刊）に記されている一節である。

三〇年代半ばに中学生となって自宅から離れて下宿することになった時に、大事な愛蔵書としてたずさえていったうちの一冊が、『われ等若し戦はば』（一九三三）と題された、平田晉策による日米未来戦の物語であったことが、妙になまなましく記憶に残っている。（中略）この少年がやがて十九歳で迎えた日米戦争のさなかに、メルヴィルの『白鯨』という捕鯨業の物語、ホイットマンのいわゆる「ぼくの西の海」たる太平洋を舞台とする小説をよんで、衝撃を受け、アメリカ文学専攻を思いきめるに至った次第をふり返ると、純粹観客を気取っている当の本人が、いつか日米関係という大きなドラマのうちに組みこまれ、道化じみた端役を演じていたことを認めずにいられない。この大ドラマに対するぼくの年来の執心には、我にもあらずまきこまれ、舞台にひき出された男の怨念と執着のいりまじった探索癖が一役買っているのは確かである。とりわけ、敵としてのアメリカというイメージの生れ出た時期と次第については、大げさな比喩をあえて使わせてもらえば、わが身の破滅をかけて己れの過去の秘密へとにじり寄りざるを得ないオイデプスにも似た探索の衝迫が働いているらしいのだ。<sup>16)</sup>

佐伯はここで、<sup>、</sup><sup>、</sup><sup>、</sup><sup>、</sup><sup>、</sup><sup>、</sup>自分の意志でアメリカ文学専攻という自分の進路を決定したように思っていたが、実際には主体的どころかあたかも運命の女神に操られているように、一步一步、日米関係という大きなドラマの中のひと

つの存在として自分が組み込まれていたのではないか、いやそれどころか、まるでオイデプス王のようにじりじりと「わが身の破滅をかけて己れの過去の秘密へとじり寄り」っているような状況だったのではないかと語っているのだ。佐伯にとってこれらの言葉は比喩ではない。まさに文字通りに取るべきものである。佐伯はこのとき日本とまさに一体化しているのだ。日本が次第に日米戦争へと向わざるを得なくなったと同じく、自分も敵国の文学を専攻する運命へと知らず知らずのうちに向っていた！という驚きである。これは実際、驚くほど誇大的な喩えであり、驚くほど独特な歴史認識である。1969年当時の佐伯には、しかしながら、自分の来し方を顧みれば、そのように見えてしまうということなのだ。と同時にこのような喩えを使わざるを得ないような何かを、あるいはこのような喩えが必然性を持って口についてくるような何かを、佐伯がその少し前に実際に体験したのではないかと論者は考えている。それを経ることで佐伯はそのような独特な歴史認識を持つようになったのではないか、そしてそれは、おそらくは1962年9月から約2年間、アメリカ中西部に滞在した時に体験したのではないか、論者はそのように推測している。そのためもう一度1960年代の佐伯に戻ってみななければならない。

## 第2章 佐伯のアメリカ体験

佐伯は戦後、アメリカ文学の専門家として出発する。1950年、佐伯28歳のときに第1回のガリオア留学生としてアメリカ・ウィスコンシン大学に1年間留学し、帰国後は富山大学から東京都立大学へと転任しながらも文芸雑誌の海外思潮紹介欄の常連執筆者として活動し、さらには文学時評家としても活躍しはじめる。その佐伯が、英文学者の中野好夫の推輓で、1962年9月から1964年6月までのほぼ2年間、アメリカ・ミシガン大学でアメリカ人の学生相手に日本文学の講義をする。この体験が佐伯にもたらしたものは実に大きく、佐伯のその後の批評活動のすべてはここにある

と言っても過言ではないのだが、そもそもミシガン大学滞在は佐伯にとって二度目のアメリカである。しかしながら朝鮮戦争勃発時に軍用機に乗せられて日本を出発するという慌ただしい中で始まった最初のアメリカ留学は、佐伯自身も言うように「まだ占領中で、敗戦国民という自意識がしみついていた上に、物質的な生活水準の面でも、彼我の差が大きすぎた」<sup>17)</sup>、そのため「手に負えぬ怪物にいきなりのしかかられたような圧迫感をおぼえ(た)」<sup>18)</sup>佐伯は、逆にアメリカを一刀両断に批判することで精神の平衡を保とうとする。しかし同時にそう批判する佐伯自身、「ぼくは、こうした批判をささえる時間の厚み、伝統と歴史の感覚が、自分の国で、足もとから急激にくずれさりつつあることを思い出さぬわけにはゆかなかった」<sup>19)</sup>と記している。ここにある通り、最初のアメリカ滞在では戦勝国アメリカに何もかも圧倒され、その結果、肝心の日本そのものも佐伯の中では徹底的に崩壊してしまったというのが正直なところであったと思われる。それが二度目の滞在となると日本が占領下から高度成長の国へと大きく移り変わり、経済的にも豊かさを実感しはじめたということで、佐伯自身にも心の余裕が生まれ、以下のような感慨を記すことになる。

アメリカの雑種性や遠心力がまず気にかかるというのは、つまりは、ぼくが日本人であるせいかも知れぬ、と気づき始めた。(中略)そして事実、雑種国アメリカのイメージが、ぼくの内側で固まってくるにつれて、その向う側の対極におのずと純種国日本の姿が、くっきりと浮び上がってきたのだ。これは、いわば相関的な認識作用であって(中略)二つの国が互いに相手をうつし出す「鏡」の役を呈しはじめたあんばいであった。日本よ、お前は何と等質的、均質的な純種国なのだろう、ぼくはそう眩かざるを得なかった。(中略)この感慨は、ぼくの内側で終始、低音バスのようにひびきつづけて止むことがなかった。明治以前と以後の間には、文学上、また文化上「断絶」が生じ

た、という「定説」のごとき、じつは一種の自己欺瞞以上のものではない、と思われてきた。<sup>20)</sup>(傍点佐伯)

佐伯がここで触れている「日本文学の連続性」という主題はこの時期以降佐伯がたえず繰り返すことになるのだが、ここでは文学や文化に限らず、まずは日本という国全体がアメリカとの「鏡像」関係のなかで浮かび上がってきたことに注目したい。実際、佐伯は「文学的な持続という問題は改めてとりあげるつもりだが、ここでは(中略)異民族の支配、侵入を受けることも、こんどの敗戦まで全くなかったという条件が、育てあげた純種民族のメンタリティと感受性のうちに一寸比類のない有機性、一貫性を生み出した点を指摘しておけば足りる」<sup>21)</sup>と記しているように、二度目のアメリカ滞在で佐伯の脳裏に浮かび上がってきたものは純種民族の一貫性に包まれた日本列島の姿なのだ。実際、佐伯はこのことを、佐伯が偏愛する井伏鱒二の作品『漂民宇三郎』(講談社、1956年刊行)に託しながら、繰り返し強調する。

かくべつほくらの印象に残るのは、主人公の宇三郎が洋上漂流の最中にふと見つけ、異常なほどの心くばりで洪紙袋にいれて保存する粃、「糯米の粃が一粒、粳米の粃が一粒」という、二粒の粃である。ハワイに上陸すれば、宇三郎はただちに、米作りに熱中して、「二粒の粃で、このウワへの島を豊葦原瑞穂の国にするつもりじゃ」と思わず口にしてしまう。(中略)この主人公の投げこまれた状況、つぎつぎとなめさせられた「前代未聞の」苦難の中で、彼の生き抜く意力をささえてくれた支えが、「二粒の粃」に他ならなかったことだけは、はっきりと確認しておきたいのだ。(中略)「二粒の粃」というのは、根深い共同的な広がりを感じさせるイメージである。たんに宇三郎個人の意志や個性を超えた、大いなる持続という象徴的な含意がおのずとた

だよっている。そこに含意されているのは、日本人としての同一性 (identity), また連続性ではないだろうか。<sup>22)</sup>

ここで佐伯はほぼ同じような意味を有する言葉を次々とあげている。すなわち「根深い共同的な広がり」, 「大いなる持続」そして「日本人としての同一性 (identity)」と「連続性」である。これらが「純種民族の一貫性に包まれた日本列島の姿」とびったり重なり合っていることは言うまでもないだろう。佐伯はさらに論を進め、この「二粒の粳」の背後に人間の歴史を超えた自然の大きなサイクルまでも見ようとしている。

「宇三郎はオイレンとの間に自分の子供が出来たので、思ひつきを得て、広東米と日本米との交配種をつくろうとして失敗した。米の場合は、人間と違って、お互いに交配を許さないほど祖先が遠く隔ってゐるのだらう」。この結びの部分をやんで、読者は粳種子という象徴の一貫した重要性を改めて思い起さざるを得ない (中略)。つまり、粳種子は、人間よりも遙かに古く、その息の長さ、恒久的な連続性において、人種の差などを桁違いに立ち超えた何物か—自然とよぶ他なものを思わせずにおかぬ。宇三郎という主人公の後景に、日本が現われ、そのまた遙か奥の後景に、自然が浮び上ってくる、といってもいい。<sup>23)</sup>

佐伯は「宇三郎という主人公の後景に、日本が現われ」と言うが、実はアメリカの中西部の厳しい冬の寒さにひとり耐えていた佐伯の前にも「根深い共同的な広がり」を持った日本列島の姿がひとつの像としてありありと立ち現われてきたのではないか。そしてこのとき、佐伯には、同時に、日本と鏡像関係にある「雑種国」アメリカの姿も見えていたに違いない。先に「雑種国アメリカのイメージが、ぼくの内側で固まってくるにつれて、

その向う側の対極におのずと純種国日本の姿が、くっきりと浮び上がってきた」と佐伯が記している箇所を論者は引用したが、本質的には同じことだ。重要なのはこのとき佐伯の中でたえず日本とアメリカが鏡像のように互いに映し合っていたということである。その結果、太平洋という巨大な海を挟んで東と西に位置する日本とアメリカが、時には戦うこともあったが、佐伯には運命的な隣国同士としてはっきりと見えたのだ。しかも浮かび上がってきた日本は、雑種国アメリカとは異なり、「大いなる持続」を有し、「日本人としての同一性(identity)」や「連続性」が昔から維持されているのだ。言うなれば、古代以来の伝統と歴史がここに幾層にも積み重なっているのだ。佐伯はこのときこのことがまざまざと見えたのだ。

先に見たとおり1960年当時では、約20年前の学生時代の自分を想起しながら書いているにせよ、「社会的、文学的環境からの異常に際立った孤立」とか「文学史や系譜という問題は、ぼくの念頭には浮かばなかった」という表現の連続であった。それが、アメリカ・中西部での2年間の滞在を通じて、佐伯は、伝統と歴史が幾層にも積み重なっている日本の姿がはっきりと見えるようになったのだ。このとき佐伯には「異常に際立った孤立」などという思いはもはやまったくない。むしろ日本という「根深い共同的な広がり」と強く結びつくことで、宇三郎と同様に、何とか生き抜こうとしているところさえある。それまでの、いわば観念的な孤立願望から、佐伯はすっかり解放されたのである。ちなみに、このときの佐伯は、宇三郎の背後に「のっぺらぼう」とした現実を見ている。

宇三郎には、国家という後ろ立てもなければ、排外的な熱狂に駆り立てられている訳でもない。(中略) およそそうした支柱が物の役に立たぬ場所に、始めから放り出されるのであり、そういう「のっぺらぼう」の場所で彼はふと見出すのが、「二粒の糶」に他ならない。(中略) それ以外の依拠が一切意味を失い、頼りにならなくなった「のっ

べらぼう」の場所で、ふとこれを見つけ、これを守りぬこうと思いきめる。これ以外になかったものだから、と低声に呟きながら。<sup>24)</sup>

ここで佐伯はカギ括弧付きで「「のっぺらぼう」の場所」という表現を繰り返している。この繰り返しはただ事ではない。この表現は佐伯がアメリカ・中西部で過ごした2年間を象徴するものなのではないか。言い換えれば、佐伯が厳しい異国の現実にとり向かい合っていたということではないだろうか。もちろんこの場合の「厳しい異国の現実」とは現実生活の厳しさを意味しているわけではない。そうではなく、佐伯の意識下においてアメリカがそのようなものとしてあったということの意味している。それをよく示す例をあげよう。

ぼくが始めてハワイの土をふんだのが敗戦から五年目、一九五〇年夏のことだった。(中略) おそらく、当時の真珠湾は、ぼくにはアンタッチャブルともいいたいほど刺戟が強すぎた。(中略) アメリカ人との接触では、Remember Pearl Harbor がいつ相手の口から飛び出してくるか、身構えざるを得ないような時期でもあった。(中略) このあと、ハワイには何度も立ちよりにながら、わがうちなる禁忌感情は、なかなかその支配、抑制をゆるめてくれなかった。ぼくが、もう一度真珠湾に近づいて、しげしげとその全容を見わたすに至ったのは、ようやく一九七三年五月のことである。(中略) 年内の内なるしこりが、ふっと溶けさるような解放感をおぼえたことも事実で、いわばタブー犯しの試練を、この時のぼくは、くぐり抜けたのである。<sup>25)</sup> (傍点佐伯)

これは真珠湾の場合であるが、しかしその緊張が解けたのが何と戦後も30年近く経ってからのことである。これが戦中派世代の持っている敵国

アメリカへの思いなのであろう。このような現実があるからこそ、佐伯が「厳しい異国の現実にひとり向かい合っていた」と考えられるのだ。そして、宇三郎が二粒の糶にすがりついて生き抜いたと同様、佐伯もこのとき自分の手元にあった日本文学、日本文化にすがりつくことで日本人として生き抜こうとしたと思われる。だからこそ、日本文学、日本文化の連続性、持続性を心強い思いで文字通り実感したのではないか。これが先に論者が「このような喩えを使わざるを得ないような何かを(中略)佐伯がその少し前に実際に体験したのではないか」と記したことの意味である。佐伯は大きく変貌する。その結果、佐伯はそれまでの観念的な文学観から完全に脱却し、日本文学全体の実体をその連続性や持続性とともにはっきりと把握することになったのだ。まさに文学的伝統というものを認識したのである。この意味は今日想像する以上に大きい。というのも、江戸からの断絶、戦前からの断絶という断絶史的観的文学意識の中で文学修行をしてきた佐伯にとって、そうした意識を乗り越えることはかなりの精神的緊張を有するものであったろうと思われるからである。実際、アメリカ滞在からの帰国直後に連載したエッセイをまとめた『日本を考える』(新潮社、1966年)は、ほぼ全編、そうした緊張感に包まれている。その中で佐伯は「文学史を底で支えるものは、文学的持続をおいてあり得ない。もちろん、それぞれの時代は、先行する時代に対する批判、否定をふくみつつ、先へふみ出す。しかし、批判や否定ということ自体、持続ぬきでは考えられぬことであり、さらにいえば持続のヴァリエーションにすぎない」<sup>26)</sup>と記しているが、こう記すだけでもかなりの重圧を感じていたように思う。その佐伯がこのとき日本の文学的伝統を実感し、まさにその眼で伝統そのものを見たのだ。ここで誰しも T. S. エリオットの次の一節を思い浮かべらるだろう。

歴史的な感覚は、過去が過去であるということだけでなく、過去が現在に生きているということの認識を含むものであり、それは我々

がものを書く時、自分の世代が自分とともにあるということのみならず、ホメロス以来のヨーロッパ文学全体、及びその一部をなしている自分の国の文学全体が同時に存在していて、一つの秩序を形成していることを感じさせずには置かないものなのである。この歴史的な感覚は、時間的なものばかりでなくて、時間を越えたものに対する感覚であり、そして又、時間的なものと時間を越えたものを一緒に認識する感覚でもあって、それがあつたことが文学者に伝統というものを持たせる。<sup>27)</sup>

佐伯はこのときエリオットとほぼ同じ地点にいる。しかしながらエリオットのように断言するまでには至らない。それをするには日本文学史全体の再構築という大きな作業が必要なのだ。しかしそれには道具がまだ十分ではない。佐伯はこれ以降その道具を求めることに専念することになるだろう。以上が佐伯の変貌の概要である。

なお、佐伯のその後の歩みに関してひと言付け加えておきたい。佐伯はたしかに「道具」を得ることはできた。だがその道具自体がなかなか面倒なものだったこともあり、結局それをうまく使いこなすことができなかつたと言わざるを得ない。これに関しては機会があれば後日論じたい。

【注】

- 1) 入江隆則「佐伯彰一・人と作品」『昭和文学全集・28』小学館、1989年、1078頁。
- 2) 平川祐弘「平成28年1月11日・産経新聞掲載、佐伯彰一追悼記事」から
- 3) 篠田一士「『〈伝統〉の創造的契機』『現代人の思想14 伝統と現代』平凡社、1969年、13頁—14頁。
- 4) 佐伯彰一「佐伯彰一先生に聞く」『東京大学アメリカ研究資料センター・オーラルヒストリーシリーズ・26』、1990年、1頁。(インタビューは1990年8月30日に実施)
- 5) 佐伯彰一『日米関係のなかの文学』文藝春秋、1984年、359頁。

- 6) 佐伯彰一『アメリカ文学史 エゴのゆくえ』筑摩書房, 1969年, 2—7頁。
- 7) 同書, 219頁—223頁。
- 8) 佐伯彰一「(海外文學) ロレンスとアメリカ文學——アメリカ小説と想像力——」『聲』丸善, 1959年秋号, 128頁—129頁。
- 9) 同論文, 129頁。
- 10) 同論文, 132頁。
- 11) 『アメリカ文学史 エゴのゆくえ』, 229頁—230頁。
- 12) 同書, 230頁。
- 13) 同書, 4頁。
- 14) 佐伯彰一『内なるアメリカ・外なるアメリカ』, 新潮社, 1971年, 9頁—11頁。
- 15) 同書, 11頁—14頁。
- 16) 同書, 36頁。
- 17) 佐伯彰一『日本を考える』, 新潮社, 1966年, 13頁。
- 18) 同書, 同頁。
- 19) 同書, 15頁。
- 20) 同書, 27頁—28頁。
- 21) 同書, 29頁。
- 22) 同書, 171頁—173頁。
- 23) 同書, 174—175頁。
- 24) 同書, 173頁。
- 25) 『日米関係のなかの文学』, 45頁—48頁。
- 26) 『日本を考える』, 147頁。
- 27) エリオット, T. S. 1959年「伝統と個人的な才能」, 『エリオット選集・第1巻』吉田健一訳, 彌生書房, 11頁。